

哲学者・モイセア マトビービッチ ルービンシュタインの生涯

上野達彦¹⁾

A Life of Russian Philosopher

Tatsuhiko UENO

一. はじめに

ソビエト連邦は、世界史上はじめて社会主義国を標榜し、資本主義諸国との冷戦時代という二極対立を構築した。しかし、その社会主義体制も、1991年12月25日にソビエト連邦が終焉を迎えたことによってあっけなく崩壊した。それはおよそ70年の体制であった。その後、ロシアでは、いくつかの曲折を経て、ロシア連邦体制が構築されたが、周知のように、政治的、社会的混乱はいまなお続いている。

体制転換後、いずれの学術分野でも、そのイデオロギー的あるいは政治的理由などから、ソビエト時代には振り返られることのなかった人々の著作の復刊が相次いでいる。本稿で紹介する、M. M. ルービンシュタイン (M. M. Рубинштейн, 1878—1953年) もその一人である。彼は新カント主義の哲学者であり、教育心理学者であった。2008年に復刊された、M. M. ルービンシュタインの著作集「生命の意味について」(M. M. Рубинштейн, “О смысле жизни.” Том I II) もそのような著書である^{注(1)}。

以下に、本稿では、帝政ロシア時代からソビエト時代への過渡期の人、M. M. ルービンシュタインの人物像や学問的立場のいわば「さわり」の部分明らかにしようとする試みの「研究ノート」である^{注(2)}。時代が大きく動き、社会がカオスと化し、混迷が深まり行く状態のなかで、改革と反動が綱引きをするという時期は、まさに過渡期の人々そのものである。ロシア社会でも、19世紀の半ばは、まさに過渡期であった。そのきっかけとなったのは、1861年からの農奴解放であり、これに続く農民、女性の解放運動、さらに教育と労働の機会均等を求める動きなどであった。この時期は、社会状況が絶えず変化し、これ以降のロシア社会はまさに激動の渦が巻き上がっていた。そしてその

「仕上げ」はロシア革命をエネルギーとし、人類がはじめて経験する社会主義社会体制の実験であった。

このような激動の時代背景のなかで、ルービンシュタインは、新たに体制を構築されたソビエト・ロシア社会主義社会体制とは異なるイデオロギーを支持した人物である。大著「生命の意味について」が出版された時期は1927年である。これ以外の収録論文は、すべて1910年代に公表されていた。初期のソビエト体制の厳しさと寛容さがどのように形成されてきたのであろうか、についても私の問題意識のなかに含まれている。

著作集の内容には興味深い表題もあるが、ここでは彼のその思想的内容の分析はのちの課題である。内容についての簡易な分析、次いで著作集のなかのいくつかについて紹介し、主に人間・ルービンシュタインについて光をあててみたい。

ここでは、まず、M. M. ルービンシュタインの人物像を明らかにするために彼を取り巻く状況を素描することから始めよう^{注(3)}。

注(1) 著作集の内容目次は、以下の通りである。

ルービンシュタイン『生命の意味について：価値の哲学、教育理論および大学問題についての著作集』（全2巻・2008年）

第I巻

目次

モイセア マトビービッチ ルービンシュタインの哲学と生涯

生命の意味について（出版年：1927年）

序文

1. はじめに

2. 哲学の基本的任務としての意味の課題

第1部 歴史的概観

3. 生命の唯物論的正当性（デュリング、ルクレッツ

¹⁾ 放送大学三重学習センター所長

- イ)
4. 楽天主義と悲観主義の哲学における生命の意味の課題 (ライブニッツとショーペンハウアー)
 5. 批判の哲学における生命の意味の課題 (カント)
 6. 先験的観念論の哲学における生命の意味の課題 (フィヒテ)
 7. 全論理主義の哲学における生命の定義 (ヘーゲル)
 8. 観念論哲学における生命の意味の課題 (ロツツ、ラパチン)
 9. 宗教—哲学的先験論哲学における生命の定義 (ソロビエフ)
 10. 宗教—哲学的先験論を学ぶ意味の課題 (ブリヤハコフ、ベリヤーエフ)
 11. 美学ヒロイズム哲学における地球生命の擁護 (ニーチェ)
 12. 創造的進化哲学における生命の意味の課題 (ベルグソン)
 13. 最高のカテゴリーとしての生命の思想
 14. 肯定的な意味とそれを確立する条件

第2部 人間の哲学

序文

1. 哲学の出発点としての「私」の課題
2. 真の心理主義とそれとの闘争
3. 人格としての私
4. 他人の私の課題
5. 特殊な因果性としての人格の自由
6. 外界の現実について
7. 人間中心主義を擁護して
8. 真理の課題
9. 現実の概念について
10. 転換段階としての人間
11. 機械主義から目的論へ、唯物論から観念的現実主義へ
12. 本質の創造について
13. 創造過程の途について
14. 個性の創造と個人の創造
15. 共同体のなかでの個人の創造
16. 地球生命の擁護について
17. 死と不死について
18. 善と悪の課題
19. 本質の創造の見地から見た善と悪
20. 絶対者の問題について
21. 人間の教育について

ルービンシュタインが引用した出版物のリスト

第II巻

目次

○価値の哲学と生命の哲学

- ・ハインリヒ リッカルト 認識論的観念論概説 (出版年：1907年)
- ・先験論的現実の問題について (出版年：1910年)
- ・ラパチンの具体的観念論概説 (出版年：1911—

1912年)

- ・デカルトの方法論と認識論の問題について (出版年：1909年)
- ・トルストイの小説『戦争と平和』のなかでの歴史哲学 (出版年：1911年)
- ・追憶フィヒテ (死後100年記念によせて) (出版年：1914年)
- 哲学、大学および社会
 - ・ロシアにおける哲学と社会生活 点描 (出版年：1909年)
 - ・現代哲学の特徴について (出版年：1909年)
 - ・敬虔な生徒であるか、または哲学的独自性か? (出版年：1909年)
 - ・時代の産物としての価値の哲学 (出版年：1910年)
 - ・ドイツの大学におけるロシアの学生の問題について (出版年：1908年)
 - ・教育学の目的と原理について (出版年：1913年)
 1. 教育学の一般的任務
 2. 教育の理想としての完成した人格
 3. 教育学の見地からの個人主義的人格と社会
 4. 教育学のいくつかの一般原理について
 - ・大学と教育 (出版年：1914年)
 - ・大学の男子継子 (若い学者の素養について) (出版年：1915年)
 - ・カントに罪があるか? (出版年：1915年)
 - ・社会主義とその真の意味 (出版年：1917年)

注(2)

このテーマは、(私にとって) 興味深いものである。これは、1914年10月14日にモスクワ大学での学生主催の学術教育研究会における演説である。冒頭に次のように述べている。「政治的に張りつめた雰囲気の中、軍備が熱を帯び、このことがどんなに重いことであっても、運命は新しい重大な試練を文化的意識のなかに用意しておくものである。」こうした政治的雰囲気の中、[大学が、真理の苗床であるためにも、学者や教養ある人々をもつ学問を理解することから生まれてくるものだという事を明確にしておかなければならない。]

大学と学生に求めることについても次のように述べていた。「大学と学生にとって重要ことは、教育についての独特な途、すなわち自己修養の途を作ることである。」それが「学生サークルのもつ役割」である。「大学と教育が相互に近いこと、そして重要な教育的任務が大学、教授や学生にあるということを理解することである。若者たち自身は、その俊敏な反応や繊細さによって前進し、これらを妨げる氷を砕かなければならない。」

インターネットの検索機能からルービンシュタインという項目を検索すると、以下のようなルービンシュ

タインについて紹介が検索される。重複する箇所があるが、3点ほど紹介しよう。

①ルービンシュタイン M. M. (1880 (78の誤りか) —1953年)) は、わが国の大心理学者、哲学者であり、また教育学者、高等教育の管理者であり、「教師の指導者」とみなされている。『教師の課題』(1927年) という著書には緊急で、今日的な教育学の課題が示され、検討されている。著者は、深い哲学的、心理学—生理学的および教育学的認識に支えられ、専門教師の人格の重要な基準、その形成と発展の法則と途を甦らせている。

②ルービンシュタイン M. M. (1878—1953) は、ロシアの心理学者、教育学者、哲学者である。教育学の科学的基礎としての教育心理学を構築した(『一般教育学と関連した教育心理学概説』1913年)。ルービンシュタインの仕事のなかには、青年心理学の課題の発展があった(『青年の心理学、教育学および衛生学』1926年)。ルービンシュタインの人となりは、4つのシステム的特質の統一を形づくっていた。「自然の子」、「個人」、「社会」、「文化メンバー」という人間である。30年代以後、イデオロギーの理由によって、ルービンシュタインの役割は、心理学の発展のなかで黙殺されてきた。

③ルービンシュタイン M. M. (1878.06.15—1953.04.03) は、心理学者、教育学者である。フライブルグ大学哲学学科を卒業した(ドイツ・1905)教育学博士である。歴史—文献学部教授(1918年)。モスクワ大学で心理学と哲学を講義した。東シベリア大学の管理者、初代学長(1918—1920)

学問関心部門：哲学、教育史、教育学、心理学。

年齢および教育心理学の課題を構築し、思考力、社会—法的知識、子どもの読書関心を研究した。社会的、家族的教養、美学的、性に関する教養の問題、中等および高等学校における学習の内容と方法の課題に関心をもった。学習と教養の問題は、目的、任務、原則の一般哲学的定義と関連している。このための中心的課題となるのは人間である。人間には創造能力がある。完成された人格の概念のなかに、「身体と精神に個別に発展した強力な生命力ある社会的な文化—道徳的力としての人間」という特質を統合した。ここに人格の傾向が特に注意を必要とする。すでに1915年に家族との結びつきのなかで、就学前、就学および高等学校の活動における統一した原則が公式化されていた。教育心理学への本質的な寄与は、青年の研究である。青年期の人格と行動の心理学的分析から、独自志向、自決希望、生きる意味の探索、自らの行動の指針などのように、希望は別のものになり、社会的支持を得ることなどになる。

<http://biblio.narod.ru/gyrnal/vek/vek12/1912-l.htm>

<http://psytu.narod.ru/Spravka/Person/r.htm>

http://www.psy.msu.ru/people/rubinstein_mm.html

<http://psytu.narod.ru/Spravka/Person/r.htm> などである。

三. ルービンシュタインの業績と評価

まず、著作集の冒頭(表紙の裏側)における本書の宣伝を兼ねた紹介である。

「初めてロシアの哲学と教育学を統合させ、リッカルトの弟子で、イルクーツク大学の創設者、ルービンシュタイン(1878—1953)の著作集が出版された。著作集には、哲学の基本的な労作『生命の意味について』が収録されている。その内容には、フランスとドイツの実存主義の理論を多く先取りする生命と価値の哲学についてのオリジナルな構想が含まれている。第二巻は、西欧とロシア哲学史についてのルービンシュタインの重要な著作が含まれている。それらのなかには、エルナの「カントからクループへ」というスキャンダルな論文についての論争的反応もある。著作集は、ロシアの社会生活や学術生活のなかでの大学の意味と役割について書かれた哲学論文やメモが収録されている。ルービンシュタインの著作は、明瞭な文体と平易な言葉に優れており、ロシアと西欧の思想史についての研究者ばかりでなく、20世紀のヨーロッパ文化と哲学に関心をもっているすべての読者にも有益であろう。」

次に、本書の「Д. В. Ивонф「M. M. ルービンシュタイン：人物像と基本的心理学思想の点描」これはやや概説的な紹介である。長いが、本書の位置づけについての重要指摘でもある。<http://www.psyche.ru/catalog/is1/element.phpID=1191?>からの要約である。

今日までに、心理学—教育学者として、しかるべく評価されてこなかったが、人物としてルービンシュタインがいる。彼は、多くの学術論文を執筆し、わが国の哲学および心理学の知識領域で多大の貢献を果たしてきた。このことに関連して、ルービンシュタインの心理学—教育学を統合した見解はこれを生成し形成するために前提とされた必要なものであった。

ルービンシュタインの創造的活動への関心は、心理学—教育学界のなかに人間の人格を形成する何らかの課題を記述する際に断片的に生じた。学者の著作に言及することが含まれている。彼の同時代人の著作—ベリヤーエブらも、さらのちの学術著作—アブラモボイらの見解も同様である。しかし、上記の著作には、ルービンシュタインの心理学—教育学の見解を生成する源、彼の学術構想を形成する前提を十分に解明していなかった。それらのなかには、現代心理学やその実務にとっての心理学—教育学的課題とその意味についての学者の理論的アプローチの詳細な分析が欠如している。多くの著作、伝記および文献上の源のなかで、ルービンシュタインの伝記を記述するにあたって実際の歪曲を許していたことを述べなければならない。この著作のなかに任務がある。それは、点検された事実

資料にもとづき、その生涯の歴史的条件下でルービンシュタインの心理学的に人物像をよみがえらせたことにある。

モエセフ マトビービッチ ルービンシュタイン(1878—1953)は、ルーテル教信仰の商人の家庭に生まれた。ルービンシュタインの両親は、子供たちに良い教育を行おうとし、このためベルフネウデンクキー郡の学校を卒業したのち、彼はイルツースク県のギムナジウムで教育を続け、1899年にカザン大学に入った。カザン大学は19世紀と20世紀のはざまの学術センターであった。そこでは、すべての田舎のロシアの貴族出身者でない者や貧困した貴族が学んでいた(イワノフ、2000年、11頁)。しかし、多くの学生の認識のなかに、当時の教育活動思想とは、外国の大学で発表されたものであった。そのなかに自然科学や哲学思想が集中的に展開されていた。ルービンシュタインは、このような志向に影響を受け、古典的なヨーロッパの大学に研修願を提出し、彼を受け入れたドイツに出発した。彼は、ドイツ語が堪能であり、2年間ベルリン大学自然学部で研修した。講座の教師は、彼にドイツ語と世界学を究め、勉強を続けるために、フライブルク大学の自然学科に招聘された。

三. 哲学者・ルービンシュタインの生涯

上述したように、ルービンシュタインは、19世紀末の帝政ロシア時代から20世紀半ばまでのソビエト・ロシア時代の哲学者であり、同時に教育学者・心理学者でもあった。波乱に満ちた、彼の生涯を画くことは容易ではない。彼を取り巻く政治—社会状況が複雑であることに加えて、ロシア革命という洗礼を受け、それ以降に新たな体制の哲学分野のなかで「忘れ去られていた」名前であり、そのことはロシアの知識人史のなかに公然と蘇らせるときがきた。

以下は、近年に復刊された『生命の意味について』(編者)からの要約である。

ルービンシュタインは、1878年6月28日(新暦)にザバイカル州ベルフネウニスキー郡ザハロフ村で商人の家庭に生まれた。その後、ベルフネウニスキー(現在ウランウデ)の高等小学校を卒業したのち、イルクーツクの県立ギムナジウムで教育を受けた。1899年には、カザン帝国大学に入学した。カザン大学は、さまざまな学問分野にその名声をとどろかしていた。大学には、豊富な蔵書が収集され、外国の教育センターと連携していた。彼は、カザンで一年を過ごしたのち、妻—ゼスマン—とともにドイツに研修に出発した。1900年5月にベルリン、次いでフライブルクで医学を学んだ。ここで彼は、新カント主義哲学(まずペンデリバンドとリッカルト)に触れ、これに夢中になり、1901年には哲学部に移った。1905年には、リッカルトに提出した学位論文「ヘーゲル体系の論理的基礎と歴史の帰結」が合格し、これをドイツ語とロシア語で発

表した。彼は、ベルリン、ドレスデン、ハイデルブルクの大学に勤めたが、1907年にロシアに家族とともに帰国した。ルービンシュタインの思想は、ロシアでは人民啓蒙思想に近似していることや来るべき変革の予感が彼をしてその帰国を促した。

1909年に彼の最初のモノグラフ「世界観の基礎としての人格思想」が出版された。ルービンシュタインはポルトラツキー高等女子講座で講義を行い、「哲学と心理学の諸問題」、「ロシア思想」、「教育紀要」といった雑誌に寄稿した。1910年には、モスクワ・チモミエロフ高等女子教育講座教育学部学部長職に就いた。彼は同時に多くの資格取得講座で教えた。1912年にモスクワ帝国大学哲学講座で教師活動を始めた。彼の名は、教育学の課題分野における指導的研究者の一人として、よく知られるようになり、1913年には「普通教育と関連した教育心理学」というモノグラフを出版した。

ルービンシュタインは、広い学術的な関心だけでなく、学長という管理者としての能力にも抜きんできていた。彼は、ラパーチンが主導していたモスクワ心理学会会員であり、また帝国大学での学生の研究教育募金箱の発案者であり精力的な啓蒙活動を行った。彼はまた、モスクワ教養団体の会議、シャニヤフスキー名称モスクワ市立人民大学での少就学前教育募金運動にも参加した。その他、彼は、「大教育者」シリーズの出版を試み、シュベットやブランスキーなどの思想家や教育学者の協力をとりつけた。

ルービンシュタインは、開戦を支持した。そこでは、哲学者としての自身の生き方を通した。彼は、極度に自らの市民的立場を表明しようとし、戦争の精神的根源についての時から国内にとどまることはできなかった。このような彼の立場は、「カントに罪はあるか?」とタイトルを付記した論文に良く現れている。

ルービンシュタインは、カント哲学の本質が道義的責任の主体にあることを主張した。彼によれば、戦争はドイツ文化の特性からの不可避なものではなく、逆に土台や偉大な活動家の遺訓から離れることであった。

一般的に大学問題は、哲学者がかなり稀ではあるが、関心を寄せるテーマである。このことは、ロシアの大学において哲学が弱い立場と関連していた。このことが「ドイツの大学におけるロシアの学生の問題について」、「大学の継子」、や「大学と教育」という論文の中に見られる。

ルービンシュタインは、東シベリア大学創設への期待として大学の組織プランをすでに煮詰めていた。しかし、政権の交代がツァー、臨時、ソビエト、シベリア人、そして再びソビエトと代わるたびに、そのプランに大きな影響を与えた。1918年になって、ルービンシュタインは、ソビエト人民委員の支援によって、度々イルクーツクを訪れ、大学創設への尽力を重ねていった。その後もソビエト中央政権とシベリアにおけるソビエト政権との対峙によって、大学の創設は脅威

にさらされた。この危機を救ったのは、ルービンシュタインの教え子で軍の幹部であった。シベリアに新しい高等教育機関が必要との交渉がゼロから始められ、大学創設準備が整えられた。1918年8月には臨時シベリア政府が大学令に署名した。同年10月に開学式典が執り行われた。ルービンシュタインは学長に任命された（1918—20年）。

その後、彼は、いくつかのモスクワにある大学から招聘された。1923年に体育中央研究所などで働くために首都に戻った。20年代末になって、ルービンシュタインは、観念論者、ブルジョア反動主義者としての烙印を押された。そのために最初のソビエト教育学事典の編纂作業に参加することができなかった。こうしたキャンペーンの結果として、半年間、勾留された。彼は、告訴なしに独房に入れられ、アルマアタに追放された。1933年夏にルービンシュタインはモスクワに戻ったが、一定の期間仕事に就くことはできなかった。

最後に、彼の家族のことにも触れておこう。ソビエト政権による粛清の悲劇は、この家族にも襲いかかった。1936—1937年という最も危険きわまりない時期に、彼本人は抹殺されなかったが、家族に苦しみ襲った。レニングラードで、長男—ボリスが勾留され、1938年2月に銃殺された。同じ年に祖国反逆罪でアクモンスキー女子ラーゲリにおいて、その妻にも銃殺が執行された。ルービンシュタインは、モスクワに2人の孫—4歳と6歳—を呼び寄せ、養育した。

ルービンシュタインの別のそれぞれの息子たちの運命であるが、アレクサンドルは、有機化学分野の優れた研究者の一人になり、ウラデミールは有名な音楽家になった。またビクトルはシベリアと極東の子ども民話作家となり、子どもたちのために多くの著作を残した

ルービンシュタインは、1953年4月に死去した。

このような運命をたどったロシアの哲学者は、その思想（新カント主義学派）がソビエト時代に受け入れられることのないまま、全く無視されていた。私が、彼の名を知ったのは、2008年に彼の著作集『生命の意味について：価値の哲学、教育理論および大学問題についての著作集』（全二巻）を手にしてからである。この著作集を研究するなかで、私は次のような点においてルービンシュタインに関心をもった。

①新カント主義を標榜するルービンシュタインが、極度に緊張感を強いられ、無益な粛清を引き起こしたソビエトの「ある時代」をどのように生き抜いたのであろうか。

②先述の著作集に収録されている『生命の意味について』の初版は、1927年当時、いわゆるソビエト政権の思想と相容れぬ考えであったが、何故この出版が認められたのであろうか。この書は彼の研究の集大成と

もいえる大作である。それは、1920年代後半までは「学問の自由・研究の自由」が確保されていたのであろうか。

③粛清が彼本人に及ばなかったのは何故であろうか。

ソビエト体制が崩壊して18年を経て、闇に隠れていたさまざまな出来事や人物が発掘されていくことはソビエト時代を解明するうえで、好事ではあるが、大切なことは事実とそうでない事柄を見抜くことである。

ところで、私の研究専門領域は、法律学刑法学である。この研究立場からみれば、ルービンシュタインの研究は、未知の領域であり研究途上の領域にある。周知のように、日本の法律学へのドイツ法律学からのすさまじい影響がある。その中心が新カント主義の哲学であるといっても過言ではない。かつて手島孝教授は純粋法学の系譜論のなかで次のように述べていた。「その（純粋法学）誕生ないし性格形成の過程で、当時のこれまた有力な精神的雰囲気の一つであった新カント主義から大きな規定を受けたこと」、「純粋法学は法実証主義の範譜を引き継ぐにあたって、実定法を実定法として考察使用とする後者の論理的方向をなお不十分と批判し、その貫徹を図る。この努力に強力なよりどころを提供な抛り所を提供したのが、新カント主義学派の哲学」であった（手島孝「ケルゼズム考・断章その二」法政研究第43号（2・1）131頁、九州大学、その他）。

四. おわりに

なお、最後に一言。私が専攻する刑法学の分野にも、ルービンシュタインとほぼ同じ時期を生きたニコライ・ステパノビッチ・タガンツェフ（1843—1923年）がいた。彼も、ソビエト時代には、ブルジョア学者の烙印を押されていた。しかし、彼の著作が無視されることなく、批判の対象としてその存在が評価されていた。

タガンツェフには、「人民の運命に影響を与え」、「社会や国家の政治的、経済的、社会的、精神的発展にも影響を及ぼした、その時代の優れた」人物として称えられている。私は、このタガンツェフ研究に着手し、『刑法学と人間—ロシアの刑法学者・タガンツェフの生涯』（法経論叢第14巻1号、15巻1・2号・三重大学）を連載していたが、いまは中断したままになっている。

このこととは別に、大学における教養科目の多くを占める多様な語学についてはできるだけ開講すること、加えて語学以外の教養科目のなかにも歴史的な科目や広く海外事情に及ぶ科目を学ぶ場を設けることが最低限必要である。そのためにも、放送大学の教養科目が参考になる、であろう。

（2014年10月15日受理）